



脱構築としての『般若心経』：
自らを超越するラディカリズム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 雅明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006324

脱構築としての『般若心経』

—— 自らを超越するラディカリズム ——

三二 宅 雅 明

(一)

『般若心経』ほど流布しつつ内容が多くの人びとに理解されずにいる文献も少ないであろう。しかし、すぐれた思想は難解なことばで語られはしない。「色即是空／空即是色」にしても、それほどむずかしいものではない。まずは、われわれの存在が他者によって与えられていることを実感すればよい。そもそも、『心経』のわからなさは、それを解釈説明する側の姿勢にも責任がある。『心経』は、それ自体への批判精神をも教えているから、このような自己言及を見逃してしまふと、偏った宣伝文書になってしまう。ともかく、われわれが生命あるものを真実の姿において捉えようとするひとつの視点を『心経』は提示している。本稿は、すでにその表題が暗示しているように、とりわけ、「羯諦」以下の部分の意味解明に記号論的関心を寄せるものである。ただし、△行間を読む▽というような芸当はしない。行間は、つねに空白である。仮に、そのような言い方を比喩的に解するとしても、あまり適切な比喩とは思われない。

『般若心経』は膨大な般若経典群の真髄を示すものといわれている。漢訳で二八〇字足らずの長さ(短さ?)は、要諦として間然するとこ

ろがない。文字という表現面への異常な執心が漢訳に見いだされ、この点はすぐれて記号論的である。表題の意味は、一般にいわれるように、「すぐれて包摂力のある△空の悟り▽の心髄」と理解しておいて大過あるまい。表題そのものをあまりものものしく捉えることは避けたい。

『心経』は、意味を理解しないまま唱えても△ありがたい▽といわれているが、わかって読めば△おもしろい▽といえる。もともと短いものだから、かえって、いろいろな解釈が生まれる余地がある。わかるといっても、さまざまなわかりかたがあるわけだ。基本的には、「色即是空／空即是色」の考えを中心に、思想のドラマが展開されていることを見つめればよい。その世界は人生の指針でもあり、言葉のこだまでもある。しかし、前述のように、「羯諦」以下に、『心経』のすばらしさが見いだされるのであり、その部分をどう読むかによって、『心経』全体の解釈は大幅に揺れ動く。

この文献のサンスクリット語による成立は、紀元前一〇〇年から紀元後二〇〇年ごろのあいだと見積もってよい。般若経典群全六〇〇巻のなかでは後期に属する。玄奘による漢訳は六五〇年ごろには完成している。サンスクリット語の原文には題名がない。流布している漢訳

は、末尾の文句を題名に転用したものと判断される。

『心経』の作者が表現し、われわれが受けとめる情報内容は、きわめてドラマティックなものである。人間をふくめて、この世の事物は、因と縁によって生じるものだから、因と縁が別れ別れになれば、ふたたび「空」へ還元されていく。「空」は、タンポポを黄色にスミレをスミレ色に咲かせる力でもあるから、「色」は差異をもたらす力をも秘めているのである。「行く川の流れ」が無常なのではない。それを見る人間の心が無常なことだ。人生の諸問題について、これだけという絶対的な解はありはしない。マジメな問いに不マジメな答えもありうるし、不マジメな問いにマジメな答えもありうる。マジメな問いにはマジメな答え、不マジメな問いには不マジメな答えというのでは、粹思考がつよすぎるのである。その欠陥として、たとえば、何かにむかって努力しすぎると、どうしても考えが狭くなるというようなパラノイア的現象がおこる。

ところで、たった二八〇字ほどの文書なのに、『心経』ほど解説や注釈の多い書物(空海、一休、白隠、梵語学者、高僧、シヤカマル派、釈迦+マルクス主義者など)は珍しい。『心経』も一連の情報であり、記号論からの解釈は、それなりの光を『心経』に注ぐことになる。おとし穴である「空」の解釈は、記号論ではどうなるかが問題なのである。「空」についての矛盾した見解を平気で並べているような解説書も見受けられるが、実のところは、「空」の解釈はサンスクリット原文からのものと漢文からのものがあり、おおくの注解者は後者を採用する。その場合には、字面の「空」の視覚的効果が強すぎて、意味解釈はその影響をうけやすくなる。

それにしても、科学や芸術にくらべて宗教とは何だろうか、という

疑問がふとおこる。宗教は、語源的には, *religio* (ふたたびー結ぶ) だという。自動詞だから他動詞的に解さない方が本来なのだけれども、日常的には、人間と人間、自然と人間、絶対者と人間などを結ぶと考えられる。しかし、あまり他人事のように処理してしまうと、經典の内容はつまらなくなる。『心経』の本文は、送り手と受け手のあいだの濃密な交流なのだ。思想として読むことと、信仰として読むことの違いに大きな差はない。思想としては読まない、信仰としては読まない、という偏った思い込みは、『心経』とは無縁なのである。しかも、『心経』には少なからずへソ曲がりのところがあり、この屈折を起点にして読みとりが過剰になったり不足したりする。どの宗教もみなじぶんの宗教にこだわりをもってしているが、『心経』には、それ自体にたいするこだわりをも捨てよという面が見られる。このことは特筆にあたいするのである。

(二)

『心経』といかに記号論的關係にはいるかが、われわれの問題である。『心経』を渡りに船と手軽に聖別されてもらっては困る。『心経』はもともと無学の人びとにもよくわかったはずだ。自分の生を見とおせないときの心構えとして『心経』を読むにしても、記号論から見ると、その本文は、すべてテキスト——読み手が読むべき文字列——ということになる。テキストには、とうぜん織り味がある。織り味の解釈はさまざまあって、別の機会にまた誰かが語ったら、織り味が別の姿で浮かびあがってくるのである。人を救うために書かれた經典がわからないというのは、經典が悪いのかこちらが足りないのか、どち

らかである。たいていはこちらが足りない。悟りは客観的な形でとりだされるのではなく、悟りを追及する側の無限の努力のなかに宿る。ここ掘れワンワンという形で宝の山が出てくるような、めでたい真の「自己」というものを求めても致し方ない。自我の深層の鉞脈に何かが存在するにしても、それは悟りなどではあるまい。

前述のように、『心経』は矛盾をもつ表現を含むから、その内容をどう解析していくかは、言語の本性の理解に連なる重要な課題である。そのためには、自己の外側の輪郭を柔らかくして、『心経』にあたってみるわけだ。日常的な考え方は、質の異なった発想法にふれるだけでも意味がある。固定した考えは大脳の単細胞化であり、他方、悟りは、自己が宇宙の心に入って一体化することである。『心経』は字面が単純ゆえに、内容はほぼ無際限に拡がる。ことばを正確にのみ書こうとするような小さかしい意図は持っていない。

『心経』の理解には、まず、そのドラマの構成を見なければならぬ。劇中人物は、仏陀と観自在菩薩と舍利子である。そして、その周囲には聴衆がいる（はずである）。仏陀は、観自在菩薩を褒めそやすような口ぶりで語り始め、主役としての登場をうながす。この菩薩の紹介部分は、自然な形で理解すれば仏陀の言葉であり、修業中の菩薩を持ちあげている。菩薩は仏陀の慈悲心を波動の感覚のように受けとめる存在の象徴として、人びとの苦を自在に見抜く。自分だけでは足りない、他の人たちも救わなければという菩薩の境地は、大乘仏教の教えの根本的な現れである。ここでは、菩薩は劇的スターの役割を帯びる。他方、舍利子は、ドラマとしては、上座部仏教の考えを多分に残した求道者にとどまる。したがって、観自在菩薩が、舍利子に完全な知恵にいたる道と考え方を説ききかせることに意味がある。観自在

菩薩に聞き入るのは舍利子なのだが、この人物の発言がまったくなされていなくて面白い。つまり、「照見」しているのは、（仏陀と）菩薩だけであり、舍利子は、達観とはほど遠い位置にいたのである。なお、最後の「羯諦」以下は、マントラのファンファーレになっている。

玄奘訳と原典を比較してみると、玄奘訳は大胆な加筆、削除、意識、音訳を含んでいる。ということとは、漢訳は、すでに入意味するものVと入意味されるものVの双方において、極めて恣意的であることを示しているのである。

そもそも、インド仏教は、仏陀の死後、何百年かを経て、仏陀の教えにあらたな展開が加えられ、仏陀そのものへの信仰からさまざまな菩薩信仰が派生した。仏教の信者はすべて仏の子であり、悟りを求める菩薩であり、そうであるからには、修業すべきだという発想である。悟りには、さまざまな段階があり、ひとつひとつのプロセスもそのまま悟りといってよい。ともかく、悟りは心の奥底に何を生み出していくかにかかわる。どんな雑草、どんな虫ケラにも生きる知恵がある。

英語で死者のことをthe deadとはいわない。仏教は、キリスト教のように天上からの光によって人間の存在の意味づけがなされはしないのである。自己の認識改革がすべてなのだ。『心経』は、「衆生も、本来、仏なり」の世界である。ひとりひとりの自力によるめざめを期待している。「苦」や病いを忘れさせるために書かれているのではない。むしろ、「苦」や病いとともにあれといっているようだ。この経典は、最終的には、マントラによる悦ばしい声の響きによる発想の大転換を、至上のものと考えているのである。

ところで、記号なしの事実の世界は一価といえる。多価になるのは、

記号と記号の意味がかぶさり、人間の想いが交錯するからだ。『心経』はこのような言葉と人間の認識を反映してきわめてレトリカルである。△空▽と悟りと自分のアイデンティティを、大きくズラして問いかけるのが『心経』なのである。太陽にとつては夜も昼もない——物事はすべて視座でことなる。人間の歴史とは記号の解読の歴史である。神は記号なしですましているのだろうか（動物にも記号行動がある）。人間の生活はつねに二つの深淵に向かって開かれている——猛烈なファナティズムと極度の相対主義と。『心経』は、そのいずれかをも超えようとする。どのようにして？ すべてを自我に収斂させ、言語記号による二項対立の絶対性を放棄し、マントラを唱和することによってである。

本文の検討に戻る。

「度一切苦厄」は、サンスクリット語原文にはなく、玄奘の挿入であるらしい。菩薩が悟りの可能性を大衆にも拡げる思想がこれによって強調されていく。

「五蘊」についていえば、「色」という形のある物質と、「受・想・行・識」という人間の側の感覚判断作用を同時にとらえようとしているところが、記号論的に見て興味を持てるところである。記号論は、対象の存在とそれについての判断を、ことなつたレヴェルにおいて分化させつつも、同時に発生するものとして捉えるからである。いずれにせよ、「色」および「受・想・行・識」という列挙は、言語というものがある必然的に分節化をはたすことを露呈しており、人間の記号化行為の基盤がこのようなところにも確乎として見いだされるのである。もちろん、「受想行識」についても「空」との等価主語交換が働いている。このように等価交換を自由におこなうのが『心経』の妙諦なのである。

である。宇宙の流れを如実に表出するには、これが最良の表現方法であろう。

「色不異空／空不異色」という二項の設定は、それらの二項がいずれも有意の項目として存在することを前提としている。いきなり、「色即是空／空即是色」とするよりも抵抗感が少なく、導入の仕方としてはきわめてレトリカルである。△有形▽も△無形▽も相互交流の原基として捉えられている。△有形▽は△無形▽へと変換し、△無形▽は△有形▽へと変換する。両者は絶対的区別ではないから、いずれにせよ、「色不異空／空不異色」における「色」と「空」の変換が等位におこなわれていることに注目すべきである。ここは、ともかく記号論的には、すべてのものありようを△分ける▽という仕方での二項対立させたのである。「色」と「空」はそれぞれ項であり、相互に関係の構造に入っていく。

言葉を変えていうと、「色」と「空」は逆立した構造である。たがいに自己矛盾としての対立物を内包している。Aと非Aとをまず対立させ、そして、ついには相互変換をはかるといふのは、大胆な記号論的構図であり、『心経』もまた、このような構図の内部にある。「色」は「空」に形を与え限定していく。「空」はそのようにして「色」の現象化を誘い出す。「色」と「空」は縁起として関連しあう。「色」||「空」、||「空」||「色」というパドックスは、ひとたびは、十分にわれわれを驚かせる。この場合、われわれは、「空」という△意味するもの▽に振りまわされてはいけない。△意味するもの▽に「空」を選ぶことからくる誤った理解を回避しなければならぬ。「空」は、物質的な意味からメタフォリカルな意味までその揺動の幅は広いのである。

「色」＝「空」ならばこそ、万象は「空」と一体不二である。「空」と「色」は、根源力とそれの造作物といってもよい。しかし、人間のような個体に因縁すると、我執という「無明」が発生する。人間は「受想行識」のとりこになるが、自己は「色」（身体）であり、「受想行識」の作用をもつことを生かして、自らが「空」と相互依存の存在であることを見きわめればよい。「色」も「空」もそれ自体のアイデンティティを頑強に守っていても存在できないのだ。「色」＝「空」というのは、かならずしも逆説というわけではない。それぞれには、部分的にせよ他と通底するところがあるわけだ。見かけの逆説は、逆説ではない面を含むのである。

前述のように、「色」と「空」の二元に分けることは、すでに言語という記号そのものの分節性に依存している。「色即是空／空即是色」は記号学で見ると、前述のように、「色」と「空」は相互に入れ換え可能な項である。しかし、サンスクリット語の〈ゼロ〉にあたる意味内容を「空」と訳したことから生じる波紋はきわめて大きいから、この波に呑みこまれないようにしよう。「受想行識」を「空」とするときも、この世は空しいから、空しいことを空しいままとらえよ、などとは『心経』のような大乘仏典が語るはずがない。要するに、「空」とは、無限の過去から無限の未来へと、「色」を現象させる宇宙波動の象徴である。物質をどこまで細分しても「空」は見つからない。しかし、物質を構成し、変成していく力は存在している。それが、「空」なのである。

もともと般若經典群は、「空」を説くためにあるといわれる。「空」についての考え方も般若經典の歴史とともに深まる（『心経』は後期の成立とされる）。まずはともかく、「空」が空しいものと考えるの

は、『心経』の完全な誤解である。「空」を説くことは、そのまま「色」を説くことであり、その逆もまた正しい。

「空」から構成されてくる人間の五蘊がなぜ苦にあえぐのか、これは文化動物といわれる人間の宿命である。「空」の思想の理解によって、人間は共同存在の自覚をもつにいたる。これは、そのまま愛の力ともなる。他者を救うという行為は、「空」の直観のなかに基因がみいだされる。「色即是空」から「空即是色」への動きは否定から肯定への反転であり、それを可能にさせるのが般若波羅蜜の実践である。

このように考えると、訳語としての「空」には問題が多い。「空しい」という意味に徹すると、「度一切苦厄」は理解できないし、終結部において「色」と「空」に向かってマントラで呼びかける意味も消え失せる。「色即是空／空即是色」という二つの「色」をともに満足させる「空」の解釈が必要なのだ。「空」は叙述形容詞ではない。「空」は、多くの場合、名詞として『心経』のあらゆる箇所において有効な意味をもってはたらいっている。五蘊が「空」でなければ、自我は閉鎖されてしまうから、どうしても「空」である必要がある。諸物は、諸条件の結合によってのみ成立するから、「色」でありつつ「空」である。ないということと、あるということが、それほどの違いではないという感じが本文には見える。はっきりした同定／異定の理念をぼやかしている。

『心経』においては、「無明」にたいする明知が説かれている。しかし、「空」の哲学には、「空」にもこだわらないということが認められる。明知も「空相」なのである。このあたりをしっかりと捉えておく必要がある。「空」と縁起の意味の理解の仕方は、『心経』の読解において重要である。縁起とはヘリがおこること、存在物のヘリが柔

軟になることだ。ここへ何でも吸いよせる。いま、ここをこえて、タテ(時間)、ヨコ(空間)に共鳴する。「空」の力により宇宙の根元が生命体となって現象化する。「空相」であるべき「五蘊」に自我がからむと、「色」の実体性にとらわれ、「空相」に反する。高次の「五蘊」は肯定されているのである。縁起は、つながりとして初源的な生命からすべて別れ出たのだから、全生物は(無生物も入れて)一体である。無限の可能性として存在するから「空」なのだ。相依するためには、ひとまずは、切断されていなければならない。「空」≡虚無とやれば、『心経』の教えが台なしになってしまう。

仏教には神という△有▽がみられない。むしろ、すべての生き物が共存するという思想である。『心経』においては、有と無の対立の解消をすら狙っている。色即是水とは表現されなかったが、そう表現されてもよかった。色即是風でもいいのである。「諸法」の本性は、体内の細胞の独自で利他的な活動によく現れている。否定の連続だからといって虚無的ということにはならない。しかし、この否定が『心経』をむずかしくしていることは事実である。「是諸法空相」以下は、前述の「色」≡「空」をふまえて読まなければならない。つまり、「諸法」は色相であり、かつ「空相」ということになる。こう解さないと、「不生不灭」以下の十二文字が無効となる。

「色」と「無」についての分節化は、よほどの確に読みとらないと相對主義に陥る。『心経』を読むことは、言葉の論理と超論理に、敏感すぎるほど敏感になることである。メタファの積み重ねとしてのアレゴリーの実践例だ。世界の構造モデル化はすべてアレゴリーなのだ。『心経』は、イメージ語がないところが変わっている。あっても空漠としている。人生は空気で営まれても、何事も容れない無の空

間で営まれるわけではない——社会的・文化的環境というものがある。これと「空」との関係の問題だ。とすれば、「空」はきわめて現実的なものだ。「空」こそ充滿の原基なのだ。逆説を知らなければ『心経』を語れない。「空」は正にそのとおりゼロ空間であり、そこに機縁さえあれば「色」が発生する。仏教は、まあ何とレトリカルなだろう。言葉を排しつつ言葉によりかかる。

「色」は、とりわけそこにわれわれが生に関心をもつから、記号的なものである。「色」とはこのように記号的なものだから、誤解、正解、曲解、つまりあらゆる解釈が発生するところだ。われわれがどういう立場でどういう人生の関心のもとに読むか、ということがなければ、すべては、馬の耳に念仏ということになる。

「空」は、むしろ、自然科学的に捉える方がわかりやすいかもしれない。『心経』全体では、記号形態として「空」が六回、「不」が六回、「無」が三回出るから、いちじるしくニヒリスティックに見えるが、意味内容としては否定の否定を内蔵しているから、そうでもないのである。個的に「生/滅」、「増/減」はあるが、「色/空」を連続相として捉える立場からすると、そういったことは積極的な意味をもたない。「空相」とは、色相が生じる肯定面と受けとることも可能である。この辺りの六つの「不」は、いずれも否定的概念でない。記号的には、「色/空」という概念の差異は、そのまま相互補完だということがわかればよい。

「無無明/亦無無明尽」と「無老死/無老死尽」の表面的な意味の対立は、「色/空」の基本的発想からすれば、別に不可解とするほどのものではない。「無明」の存在も不在もデジタルな二分法としては、否定されているのである。以下の「無苦集滅道/無智/無得/無

所得」とともに、二項対立的思考に鉄槌が下る。そもそも、「色」＝「空」という核心的主張からすれば、「無明」の在・不在、「得」の在・不在は、在と不在との二分法が根本的に揺動しているのである。記号操作のうえからのみ必要な区分の立て方でしかなかったということになる。人生が一人に一個だけあてがわれているという事実から、「色」と「空」の二元流動論が生じる。「苦」といえども「空」だから固定したものではない。何らかの因と縁が与えられれば消滅に向かう。「空」を空しいとしてしまうと、あとは空しいと悟ることが空しいことの克服だという論理をふりまわすことになる。『心経』的にいえば、実体とか虚体とかいう概念は、それ自体としては成立しない。だから、『心経』を解説するときに何が実体だ、何が虚体性を欠くなどといってみても始まらない。実体も虚体も相対視するところに、『心経』の世界がひらけている。

とすれば、「色」も「空」も大差はない。人間にとって可視の世界と不可視の世界と思えばよい。可視の世界は不可視の世界へ変わり、不可視の世界は可視の世界へ変わる。「空」も物質的なのである（「色」＝「空」のゆえに）。両者は本来対立項として記述されているから、互いに否定的意味の形容詞にはならない。さらに、「受想行識」も「空」、「空」もまた「受想行識」なのである。これらの対立項は、それぞれ前半だけを見ると誤る。つねに對になつてゐるのである。ただし、「色」といえども単純にモノとは考えられてはいない。強いていえば、八人間の眼で見たモノ√なのである。したがって、「空」は可能性の根拠なのである。「色」との相互関係を生み出す力の根源なのである。「諸法空相」から八諸法色相√となるためには、因というタテの繋がり縁というヨコの繋がり要する。

さて、「是故空中無色」以下の部分は、ややくだい繰り返しの説明になっている。『心経』全体の簡潔さを壊すほどの量になっているのは、いささか問題だが、いわゆる「五蘊」も八十二処・十八界√も、固定した存在ではないことをいっていると思えばよい。このあたりの「空」の概念は、ほとんど縁起に近いと思われる。「色」＝「空」というのは恐怖だから、「空」＝「色」という反転によってその恐怖を止揚していく。「空」がすなわち「色」とは、すばらしい転換だ。「色」がわかるのは「色」の流動相においてである。ついには、水と草木と動物と人間が共生しているインドの思想といえようか。肉食しても、植物食しても、たまたま今日のところは、それらがわれわれを養ってくれた。いずれ逆の日も来ると考えてよい。あるのは生きるべき生活だけだ。あとは個人をこえる。生は生命の形態への閉じこめ、死は生命を形態から宇宙へ拡大するのであり、実質が個的形態から拡散することである。

東洋の宗教は、抽象的真理や仏に帰依しようとするものの、人間中心思想のあらわれである。死ぬことがわかっていても、あるいはわかっているがゆえに、人間は宗教に魅惑の眼をむける。生きるとは、生かされて生きるといことがわかるまで。人間には不可思議な可能性がある。この存在の環の一個の玉として、自己は十分に拡充的でありうる。思想として一つの領土をもったり、他の思想を属領にしようとする意志は『心経』にはない。プラトンのアイデアとも対立する。加えて、私的な欲求をあの世界で実現するなどという、どこかの宗教のような予約制度はとらない。

『心経』のサンスクリット語原典は、当時のインド人にとって難解ではなかったであろう。『心経』の中心は、表面的には、①空観によ

る安住、②因果と業をこえた知恵の完成におかれている。①と②は、一体となって現世利益となる。『心経』は意外にオプティミズムなのである。人間には生まれつき般若波羅蜜の基礎を与えられているという前提がありそうだ。たとえば、マントラは、本来そなわっている知恵の意識的無意識的引出しを狙っているのである。マントラを理解し、納得し、口で唱え、自己と社会とのかわりにおいて実践することが望まれている。マントラそれ自体に絶対的な効能があると思うのは、ことばの機能にたいする誤解である。仏陀はもともと呪術を認めていない。仏陀入滅の言葉——「おまえたちは、私が亡くなっても指導者がなくなっただと思っただけではない。私の説いた教えと掟がおまえたちの指導者である」——は、実にすばらしい言葉だ。ここから仏陀への個体的崇拜は生まれないはずである。般若波羅蜜とは、根源としての「空」（もちろん「色」に加えて）とともに生きることだ。

続いて、本稿の中心課題の一つとして、「羯諦」以下の意味を考えていく。

「色」＝「空」という図式は、それにとらわれると、そのパラダイムの無際限の拡大を伴って自己硬化する。その解放が、終結部のマントラ（真言）なのである。民衆が「色」＝「空」の思想に呑み込まれるのを恐れて、「羯諦」と切り出すのである。このマントラによって認識と記号の網目から逃れていく。無い無い（本当はそうではないが）といっている中に淋しくなった。心身論だから心身論全体が影響を受ける。このことは、短い経典だから終わり方に苦勞がある、というような視点では解決できない。われわれは、「色」を演じ、「空」を演じ、そして「羯諦」を演じる。「色」＝「空」の認識を基盤に、生命の躍動に陶醉して生きる。「色」＝「空」の図式はあまりにリアルす

ぎて、ふと虚構のにおいも漂う。「色」＝「空」が面白くて、「羯諦」というわけではないだろう（「色」＝「空」を超えて、あるいは「色」＝「空」をズラせてそうなるのだ）。「空」の主張が記号優先の思考であることを、「羯諦」で一瞬うすめていく。その思念は、「羯諦」の唱和の中に沈められる。「色」と「空」の哲学は、その純粹觀念を守らなければならない。しかし、あまり考えているとエントロピーが増大する。「羯諦」でそれを停止させるのだ。ここには、ほとんど神秘的な受動の状態がある。「色」と「空」は、これによって個々の人間の思想的把握を超え、宇宙に瀰漫する波動となる。神秘度を抑えていいかえれば、個体の「色」と「空」の受け止めが身体化されて「色」の、そして「空」の悦びとなっていく。

『心経』は、真理（「色即是空／空即是色」）もまた流動的であることを知りつくしている。だから、マントラのファンファーレが最後に置かれている意味も理解できるのである。「羯諦」以下がマントラであり、般若波羅蜜はそれ自体としてはマントラではない。マントラは翻訳不可とされ、玄奘も音写で済ましているが、意味が判らないと何にもならない。そもそも、仏陀は、言葉の力を呪術として用いることを戒めてもいるから尚更だ。

「色即是空」を思い出して、ベシミスティックにならずともよい。「色即是空」は楽しめばよいという発想も残されているのではないか。認識の構築の厳しさ（それゆえに不完全さ）を知って、それすらウヤマヤにしてしまいうような雰囲気がある。「色」＝「空」など誰が構築した思想かといっているようだ。この世のことを、たった一文や二文にまとめようとするのを恥じた観自在菩薩の姿が眼に浮かぶ。そして、聴衆とともに「羯諦、羯諦」と唱和するのだ。構築としての悟り

を自ら否定する舞踏的語りだ。

言葉が思想を呼び、その思想が勝手に敵しい形となって、われわれをものが解った気にさせるといふ、観念演技への反省、これが『心経』の末尾の機能である。われわれは、このようなことを語りうる言葉の意味形成の力に打たれる。結局、われわれをいちばん驚かせるものは、この、言葉の意味形成力なのだ。しかし、体験させなければ知恵は決して身につかない。言葉への感動とマントラはしっかり結びついていく。人間の生は、人間の実質である宇宙の物体が一定の仕方でも集まった様式である。したがって、実質としては永続で、形式としては一代限りなのである。生の充実は、観念的な意味づけによって生が自己欺瞞されていないときのみおこる。コスモロジーだけでは生きていけない。だから、「羯諦」以下のマントラ（観念的な意味づけを超えるもの）が輝くのだ。ここには、∧意味するもの∨への徹底的な恐れがある。これは、もはや反記号の世界なのである。対立観念の止揚の教えよりも歌へと向かうのである。本当のところは、聞き手の側の無数の声がそれを望んだのだろう。人間だけが祝祭時間と祝祭空間を知った。記号系の支配をふと解き放ったときの感覚は、そのような祝祭性へ向かって開かれる。このとき、その一瞬が充実すると、意識としての世界は分割されない。富も名声も解体され、瞬間の生が輝く。つまり、死の実感者もつ生へのいとおしさということだ。永劫の死への恐怖が緩和される。これはすでに宗教による宗教的欺瞞の克服の形態なのである。生きとし生けるものへの新たな視座が際立ってくる。涅槃には、ひとたび観念的につくりあげた二元対立の解消がある。涅槃は同時に切りはなされたものの接合の理想である。虚無と涅槃の同一性への恐れ、二分断されている人間の融和への願望が、「色」∥「空」

図式から発生するのである。

別の視点からいえば、「羯諦」以下は、先行の過剰な思念を捌かしていく祝祭的方法である。「色即是空∥空即是色」という思考とは異質なマントラこそ、『心経』の実相なのだ。かれやそれやわたしなどは、現象的なのだが、「羯諦」以下は非人称で生きることを訴えている。あるいは、自己など当初から無意味なのだ。とすれば、無明は肯定概念であったのかもしれない、克服されるべき原初の渾然さとして。意味づけではなくて、世界を聞くことが問題となっている。「羯諦、羯諦」というどこかフィクショナルな感がする空間が、雰囲気酔いしれて退場する人間にどのような現実が待ちうけているか。神秘主義には赴きはしないのである。機（有効性が期待できること）に赴き、現在の卑小さのなかに永遠のヴィジョンを現出させること、小さな自己の破壊、自我の意識、つまり、枠の放棄なのだ。人生の意味化を減らして生きることが、「色」∥「空」認識にまさって実現される。マントラにおいては∧悟りの境地へ渡り来た∨という、結果の先取りが何よりも有効なのである。悟りもすでに成就したので、といい切る覚悟で望むのだ。完了形であることが重要である。すでに到達したので。願望はすでに実現されたものとして心の奥底で捉えるわけだ。願うということは、すでに成就と同一であるという意識が必要である。∧成った、成った、完全に到達した、悟りよ、悦びよ∨。この終結部は、断乎たる表現で有無をいわせない。『心経』はそのところを実によく按配している。悟りは、説かなければならないから説く。そして、マントラによっていったん意識の底へ沈めるのである。世界という場において、「色」∥「空」の図式は時間法則であった。「羯諦」以下は、その時間法則を瞬時ぐらつかせるのである。

やや繰り返しのいえば、「羯諦」以下は、「空」の理を戯化した構成で、そのディヴェルティメント化だ。「空」の無化を演じていく。ある意味では色空観は現実的すぎるのである。記号論的に見れば、無の積み重ね（延べ五三回）はそのピークにおいて、肯定的な軽みへと変換されていく。あとは、言葉の軽やかな身ぶりがよい。『心経』は△意味するもの▽の軽みへ向かう。マントラは、人生を一個の大きなパフォーマンスと化する嬉遊曲だ。

仏教の中心思想である輪廻からの解脱のためには、ともかく悟りを得ればよいとする。輪廻がそれまでのインド思想の本質だとすると、悟りは、このインド思想の秩序を混沌に変えてしまうほどの革命的な認識である。『心経』成立時の関係者は、最後のマントラの意味を知っていたであろう。意味を知っていたから、たとえば『大本般若心経』では仏陀は、菩薩に「そのとおりだ若者よ」といったのであり、その場の人びとは、菩薩のことばの知恵と声の響きに感動したのである。このマントラは聞くだけで、人びとは歓喜した（と思われる）。ひとたびは「苦」と化した「五蘊」は、マントラによって「空」の根元へとふたたび結びあわされる。マントラを唱えること、それじたいが問題ではなく、「空」とふたたび一体化すること（梵我一如）が実践されている。そして、捉われないために絶対者を指定しないのである。

だから、「羯諦」ともなれば清朗な気分のみたされる。欲得を払拭した認識だ。「色」と「空」の同質化において自己の充溢を感じるようになる。小さな脱目的悦びの積み重ねにより、小人でも解脱に近い状態で生きられるのだ。何でもとりこんで自分を豊かにするという発想でもない。思想的ないし物質的積み重ねのパラノイアを排している。「色」―「辺倒も」「空」―「辺倒も」、構築への意志として解体していく。

『心経』の本質は、「色」にせよ、「空」にせよ、そのいずれかに献身しないことを述べるところにある。「空」だけが要求されているという読み取りはできない。だいいち、「空」が成立するには「色」が必要なのである。『心経』に関するかぎり、そこに「空」の哲学を発見するというのは、発見者がそうしただけのことであり、実のところは、「色」／「空」の二者択一的思考をいったん成立させ、そして、それにこだわることを斥けているのである。欲求のまずしさ、どこか自然の声を聞く、という風情がある。最後のマントラは「色」と「空」を分けるのが、むしろ、手続き上の問題だったことを示す。われわれは、色―空―色―空の流れの中へ入るのだ。一曲のディヴェルティメントとなるとき、凝縮した時間が存在しうる（色と空が重合する）。結果や目的よりも、今の瞬間の充溢だ。今を空疎にしない。その今の積合によって、所有・権力・目的は静かに抑えられている。

『心経』は宗教的認識によってではあるにせよ、それが本来的に否定している分節化のワナにはまってしまった。それに気づいてマントラを掲げたのだ。「色」と「空」との分離も反省されたのだ。「羯諦」というのは、ニーチェ的な軽やかで陽気で神秘的態度だ。ただし、これはニヒリズムと背中合わせになっている。「色」すなわち「空」というのは処理の仕方が碎組的だったわけで、われわれは、「羯諦」といって問題を両義化してしまう。「色」とか「空」とかそれじたいを極めることは空疎だ。空崇拜の空虚性に気づけばよい。「色」＝「空」図式からはみ出たものが、不安定に累積するから、『心経』は『心経』を壊すことによって『心経』たらんとするほかなくなる。

およそ西欧や日本の物質文明の普通の考えとは相容れないが、人間を物理化学的現象としてとらえているふしもある。生の活動は死に直

結するから、その死の活動も生に直結するのだ。生命体には死があり、この思想はそこから逆算されている。死んでどうなるとは、本当は問うていない。マントラは、存在のこだまである。明晰に分節し、それをシステム（自己完結）として構成することへの懐疑がある。存在するもの——自然や人間——の連帯感と融合感もここから生じる。菩薩は観念的な饒舌家でしかないようなディスクールの権化である。そして、これが否定的に肯定されていくのである。

「羯諦」といって、生き生きと人生を生きているのだ。自分の選択、積極的な主体的実践の回復、生命（＝実質の凝集力）の充実を期する。そしてその瞬間の、目的意識ではなく、いま生きていることへの大らかな笑い——これこそが、拘束として人生に対抗しうる唯一の手段なのだ。「色即是空」（「空即是色」）は差異の解消だけれど、そんなことをあげつらうのは「羯諦」に対して差異をつくってしまう。認識構築型の宇宙感覚を脱構築してしまう、このマントラは当時の破格的な文法構文だという。そうでなければ悦ばしいファンファーレにはならない。世界はそのようにあるのではなく、いま、ここにある——。構築的に考えるのをやめにして、思い切って歓喜の歌を唱和して、生きることの充盈をはかる。これは文字どおり脱構築なのである。これによって、教団の内部の組織は民衆とともにとどまり得る。前半部の覚醒が熱狂への原動力になった。覚醒だけの状態を続けることは無意味なのだ。詮じつめれば、『心経』は、熱狂（「羯諦」）と覚醒（「空」）とが逆方向に共存しているテクストなのだ。「羯諦」の熱狂性、「色」も「空」もあるかというハチャメチャこそ、『心経』の本質だ。われわれは、この『心経』という短い經典の論理的構造を、しっかり見きわめておかなければならない。瞬時あるいは半永続的に

救われると思っても、言葉と事象とが遊離しているため、わたしたちは内部から崩れていく。人間は、すべてにおいて決定不可能性の内部に生きているのであり、幻想（功名など）を追っ払っても言葉に捉えられているかぎり、現実も実相も見えないのだ。「羯諦」によって、論理の進行を遮断しておくこと。イメージの暗さがあるとすれば、それを軽減しておく。集団のひとつの心身の踊りの内部にまごめておく。コスモスの中に、今一度カオスを通過させる。緻密な連続的認識のひとつの亀裂を走らせる。そして、柔らかでリズムカルな身体にすべてを委ねる。「色」＝「空」図式は心的認識だ。「羯諦」は心身のパフォーマンスだ。

ところで、「空」の哲理を知ってもそのとおりに生きられず、ディヴェルティメント的マントラにもなじめないと、ある種のいらだちを、『心経』と人生の両面に感じる。マントラの有効性を信じられないのなら、信じられるものは、声の響き、その魅力だけということになる。夏目漱石は、

見るうちは吾も佛の心かな

という俳句を書いている。ハスの花を見ての感興であり、この極楽浄土に咲く花、ドロのなかから咲きだしてもドロに染まらず清らかに咲く、このハスを見たときの仏心を記したものだ。しかし、「見るうちは」という限定の句がある。われわれは、『心経』を読んでいるかぎりでは仏心を持ってそうであるが、漱石とおなじで、離れてしまいううにもならない。そして、いま一句、これも漱石のもので、

佛性は白き桔梗にこそあらめ

というわけだ。

このような不安の最たるものは、記号学的に見て『心経』は要する

に記号だけ、それ以上は、なにも現実の場において保証されてはいないという実感であろう。現象世界の有為転変が「空」の△戯れ∨のように見える、それが悟りなかもしれない。記号論的に見て、いちばん目立つ語は、「空」、「無」、「不」である。『心経』において、これらの文字がいちばん誤った解釈をうけやすいのは、すでに何度もふれたとおりである。「空」があるということは、「色」があるということだ。

くどいが本稿の主張の肝要部をまとめておく。「色」∥「空」図式のレヴェルで事をうまく運んでも、「羯諦」以下の部分の働きを玄奘は誤解した。日本の論者も多く誤解した。すべてを法則ではくくれないことを観自在菩薩は知っていたのだ。「羯諦」以下のマントラ・ファンファールは、脱構築の宗教がおこなう存在の追いつめ方だ。本稿の副題に「ラディカリズム」と記したのは、端的にはこのマントラ・ファンファールのことだった。これが『心経』の根柢なのであり、「色」∥「空」図式は上部構造であった。このマントラは△は△は△である∨という近代西欧的判断のカテゴリーを壊している。せつかく組みたてられたもの（「色」∥「空」の図式）すら揺動させていくのである。

『心経』が実用的かどうかは、問う方が誤っている。「色」をたえず崩して行く「空」と、「空」をたえず「色」へと形成していく場がこの世界であることを、また、マントラ・ファンファールによって二項対立的分節化を意識の底へ沈め、かつ希求する悟りの境地を（記号的には）完了実現相において捉えることが必要であると『心経』が訴えているのをわれわれは認めておけばよい。（了）